

2021年度多度津中学校 第2学年 「少林寺拳法」 授業計画

時間	内容	詳細	備考
1	・オリエンテーション ・前年度の復習	・全6時限の流れ ・補助(体幹)トレーニング 【前年度の復習】 ・武道とは、少林寺拳法とは、礼法、基本姿勢、突、蹴、基本動作(結手→礼→左中段構→順突→逆突→外受→順蹴→結手→礼)	【映像資料】 ・礼法 ・突、蹴 ・剛法 ・前年度学習(基本動作) ・天地拳第一系(単独、相対)音源あり、なし
2	・天地拳第一系(単独)	・本時の学習内容「天地拳第一系(単独)」 ○号令での全体練習→前後列練習	
3	・天地拳第一系(相対)	・本時の内容「天地拳第一系(相対)リズムに合わせて」(特に攻守の動きを合わせる) ○号令での全体練習→グループごとの練習(音楽に合わせて)→全体(音楽に合わせて)	【発表演武構成】 前年度学習の基本動作 ↓ ソロパート(基本動作・天地拳第一系単独左のみ・天地拳第一系左右) ↓ 天地拳第一系相対
4	・ソロパートの選択	・本時の内容「自分の考える動きのポイント」 ○号令、音楽での全体練習→グループごとに練習→全体(音楽に合わせて)	
5	・プレ発表	・本時の内容「グループごとに教員、谷指導員に見てもらおう」 ○全体練習→グループごとに教員の前で発表、アドバイス	【評価基準】 ・動きの正確性(基本動作、天地拳第一系単独) ・ペアと動きを合わせる(天地拳第一系相対) ・静と動(気合)
6	・発表	・本時の内容「プレ発表の課題を踏まえて発表」 ○グループごとにプレ発表の課題を練習し、指定時間内にタブレットで撮影、ロイロで提出 ・代表グループの演武を視聴、少林寺拳法学習の総振り返り	

シリーズ 中学校武道

授業の充実に向けて

つまづきをどう克服したか⑤1 ICTを活用した少林寺拳法授業の実践例

香川県多度津町立多度津中学校

少林寺拳法の発祥の地として知られる多度津町にある多度津中学校(生徒数566人)は、本誌が2018年12月号で、中学校武道必修化の移行期間から少林寺拳法の授業を熱心に行っている事例として紹介した。それから約3年、同校ではより効率的に授業を行うためICT[※]授業(情報通信技術を活用した授業)に積極的に取り組んでいるという。

最先端のICTを活用した授業とはどんな内容なのか。そしてその効果は——。今回は、本誌編集部が昨年10月に取材した同校の取り組みについて紹介する。

※ICT=Information and Communication Technology 略

1 多度津中学校のICT授業

多度津中学校は、平成24(2012)年度の武道必修化完全実施への移行期間の初年度となる平成21(2009)年度から、武道授業に少林寺拳法を取り入れた。背景には「少林寺拳法発祥の地である多度津町で採択を」という一般財団法人少林寺拳法連盟(以下、連盟)の働きかけがあった。そのため、同校の少林寺拳法の授業は連盟の職員主導の下で実施されて

きた。

しかし、13年目となる本年度では保健体育科の教員が主体となり、連盟職員が補佐となって授業を実施した。この授業形態の変更の鍵となるのがICT授業だったという。ICTを活用した武道授業の事例はこれまでも本連載で数多く取り上げている。特に新型コロナウイルスの影響によりICTの活用は全国で一気に進んでいるとみられる。しかし、ICTのメイン教材となるタブレット端末の導入には以下のような課題がある。

・タブレットを全生徒に貸与するためにはコストがかかる

・通信環境の整備
・教員のICTに関する知識と技能

同校ではこれらをどのように解決したのか。有木秀樹校長にICT授業について伺った。

「本校では2021年6月より全校生徒にタブレットを配りました。それまではタブレットは40台しかありませんでしたが、国の指針と町教育委員会の配慮により、希望通りに導入していただきました。また、多度津町の補助で無線LANなどの通信環境も整えました。現在は授業の6〜7割でタブレットを使用しています。導入の際に、研究主任が何度もICTの講習に出席し、内容を先生方に伝えるようにしました。また、今後のICT社会を生きる上で子どもたちへのICTの活用は重要になることを教員同士で共有しました」

少林寺拳法の授業でICTを導入したのも、他の種目で積極的な活用事例があったためである。保健体育科主任の末澤和士教諭は「生徒はICT教材の使用に対して非常に積極的です。授業でも生

2 授業の内容

徒は自分のフォームなどを客観的に捉えることができ、メリットが大きいと感じています」と語る。

また、授業ではICTに加え、外部指導者として連盟から引き続き谷聡士振興普及部振興課長が派遣されている。ICTと外部指導者を活用しつつ、メインは保健体育科教員が務める授業はどのような内容なのか。

本誌記者は2年生の授業を取材した。少林寺拳法の授業は本年度全体で6時間を計画、今回はそのうち2時間目にあたる。体育館で男女共修で、授業者はT1で平田あやか教諭、T2で片岡茂教諭、補助は連盟の谷聡士指導員が担当している。

まず、授業の導入として前回の復習(武道や少林寺拳法に関する知識、基本姿勢、突き・蹴り)を行ったあと、この日学習する「天地拳第一系」という単独で行う基



動きが滞っている部分について印を付けて生徒全員が再確認する



奇数列の生徒が偶数列の生徒の撮影を行う



全員で一通りの動きを練習



学習内容はデータ通信でタブレットに送られる



外部指導者の谷指導員が後ろ側の動きが分かるようにステージ上で手本を見せる



床に置いたタブレットで自分たちの動きを撮影する生徒たち

今回の授業でも楽曲に合わせて技を学習する際、CDデッキでは通常のスピードでしか再生できない。しかし、ICT教材を使用すればテンポを遅くできるため、技ができないまま終わってしまうリスクが少なくなる。また、以前はホワイトボードを使用して教員が手書きしていた内容は、タブレットと専用ペンで簡単かつ迅速に

平田教諭は「今までの授業では学習する内容が伝わりにくい部分があると感じていました。教科書の写真では動きが分かりにくく、自分が手本を見せるにも専門分野以外は限界があると感じていました。しかし、ICT教材を活用すれば動きの一部を止めたり、スロー再生ができたりと、教員側の伝えたいポイントが生徒にしっかりと届くようになりました」と語る。学習教材を熟知している者でなければ伝えきれないポイントや教員自身ではどうにもならないなど、もどかしさは多々ある。しかし、ICT教材をうまく使いこなせば、まさに「歯がゆい」ところに手が届くと感じた。

平田教諭も「今までは授業の模範などを連盟側に主導してもらっていたため、今回自分が主体となって授業を実践することに不安もありました。しかし、授業内容の単元の組み立てを谷さんと連盟の方に相談し、手探りながらも授業を実施することができました」と

書き込みができる。さらに、生徒自ら撮影することで自分の姿を周りの生徒に見られているという、良い意味での緊張感が生まれ、それが良い動きに繋がっているのではないかと感じた。

▼効果的なタブレット活用

さらに、外部指導を担当している連盟とその授業担当である谷氏との連携も授業を円滑にしている理由の一つだ。取材当日、授業を視察に来ていた連盟の秋元宏介武道授業推進担当によると、「平田教諭と谷振興課長は積極的に授業内容を模索し、念入りに授業の組み立て方について話し合っていた。例えば、今回使用した動画は授業の内容に合わせて連盟が作成しました」と語る。

本形の説明に入った。ここで平田教諭は生徒にタブレットを開くように指示。そして、自身もタブレットを操作しながら体育館前方のスクリーンを使って天地拳第一系の動きを動画で見せた後、プレゼンテーション用のソフトで詳細を説明。その際、平田教諭はポイントとなる部分に赤線を引き、生徒の注目が集まるようにしていた。

その後、体幹トレーニングを行った。動作の手法は谷指導員が行った際に指導やサポートを行っていた。次に前回学習した基本動作を行い、天地拳第一系の動作説明に移った。谷指導員が①順突②逆突③右拳外受、左拳横鉤突④上受⑤同時受⑥払受⑦蹴、という七つの構成要素について手本を見せ、平田教諭が細かく説明し、生徒たちは見様見真似で動作を行う。生徒の後ろにはT2の教員が入り、上手く動作ができない生徒に声かけを常に行っていた。

続いて、平田教諭が生徒に「リズムに合わせてこの動きができる

ように、音楽に合わせて学習しよう」と言うと、突如スクリーンから陽気な音楽と動画が流れ出した。これは、少林寺拳法の授業を生徒が少しでも楽しいと感じてもらえるよう、平田教諭が考えた「リズムに合わせた学習法」だという。楽曲は音楽に詳しい生徒に「天地拳第一系」のリズムに合う楽曲を探してもらった。

リズムに合わせた学習では、まず動画の速度を落として一連の動きを練習。生徒が一定の流れで動作ができるようになった後に生徒同士で動作の確認を行った。列ごとで一連の流れを披露し、前後の生徒同士が互いの動きを撮影しての自主学習へと移った。生徒は2〜4人のグループになり、互いの動作を撮影し合いながら動作の流れを確認・習得した。

しばらくグループ学習を行った後、平田教諭が全体的に動きが滞っている部分を改めて説明し、その部分を全員で再度確認した。この時も平田教諭はタブレットを使い、体のどの部分を動かすべきかについて画像に印をつけながら

説明した。その後は音楽を流したまま、生徒のグループワークの時間を取った。生徒たちはタブレットを使って工夫しながらのおの撮影を行いつつ、自分たちの動作の確認。最後に全員で実際のリズムに合わせながら天地拳第一系を復習し、授業は終了した。

3 武道授業の中でのICT活用の意義

今回の取材で分かったことは、平田教諭がICTを非常に上手く活用していたことである。通常の授業でICTを使用する場合、動作の確認や生徒の撮影などで使用する事例は多い。

しかし、平田教諭の授業では一つ一つの動作の説明や資料の表示などにタブレットを使用していた。といっても、タブレットに全てを委ねている訳でもない。平田教諭自身があくまで説明の主体となり、その補助としてタブレットを使用していた。



タブレットで自分の動きを確認する生徒

話す。

例えば、授業で谷指導員が生徒に手本を見せる際、正面だけでなく後ろ姿を見せることも多くあった。前向き動画と実際の谷指導員の後ろ姿の動きによってより立体的に理解することができると。

平田教諭は「動画と生の動きを見ることでより鮮明に生徒へ教えたいことが伝わると思います」と、ICTと外部指導者両方の活用の利点を説いた。

4

授業のまとめと 今後の課題・展望

平田教諭は今回の授業の目標を、「一つの動きをしつかりとできるようにすることより、法形の全体像をつかんで6〜7割できるようにすること、生徒が少林寺拳法を少しでも楽しいと思ってもらえるようにすること」と定めていた。取材中、生徒から「楽しそう」という声や笑い声が聞こえることが多かった。これは平田教諭が計画した授業の構成が効果的だけでなく、生徒への伝え方や言葉かけ、テンポの良さがあつたからだと思われる。ICTの活用がメインとなりつつも教員の主体性が欠かせないのは、ICTを活用した授業を展開していく上でも重要な点であろう。

しかし、平田教諭は授業についてはまだ課題があると語る。「今回は音楽に乗せながら動作を学習しましたが、正直、授業直前まで本当にこれで良かったのかと

の悩みがあり、授業の展開では改善すべき点が多々あると感じています。例えば法形を練習する時間がやや少ないように感じます。そのため、タブレットを使用して生徒自身が動ける時間を作れるようにしたいと考えています。また、タブレットのデジタル資料と紙の資料のバランスも模索しています」

タブレット使用の課題に関して、末澤教諭は「子どもたちが授業に関係ないことを検索してしまうという懸念があります。タブレットには簡単に手本を探そうとできる反面、調べれば簡単に答えが出てしまうというデメリットもあります。今後は教員側の働きかけによって生徒が考えを深める場面を少しでも増やしていきたいと考えています」と話した。

最後に今後の授業の展望を末澤教諭、平田教諭は次のように話す。

▼末澤教諭

「ICTの活用はコロナ禍でも非常に役立ちます。一昨年の緊急事態宣言の際はICTの設備は整っていませんでしたが、今後同様のことがあった場合にはすぐに対応

ができるように現在、実験を行っているところとです。ICTの活用で深い学びが実践できる授業を常に模索していきたいと思っています」

▼平田教諭

「今後は少林寺拳法の授業をやる際に生徒が少しでも楽しみにしてもらえよう、学習課題の設定などを工夫したいと思います。授業時間数についても改めて検討していきたいと考えています」

最先端の技術を活用した多度津中での少林寺拳法の授業。そこには少林寺拳法を生徒に楽しいと感じてもらいたいという教員の願いと努力が見えた。そして、その思いを具体的に伝えるためにICTの活用は重要な役割を果たしている。情報化社会の中で、ICTを活用した授業は今後さらに重要性を増していくだろう。武道授業でもICTの活用や工夫をさらに模索していくことで、武道に対する生徒たちの興味・関心を引き出すことができるようになるのではないだろうか。

(文責・和久田侑里)